

筑波大学医学専門学群同窓会



桐医会会報

1999. 7. 9 No. 46(臨時増刊)



牧豊先生を偲んで

牧 豊 先生 略歴

1924 年	6 月 30 日茨城県日立市生まれ
1949 年	千葉大学医学部卒業
1958 年	千葉大学講師（神経精神科）
1965 年	コロンビア大学神経研究所脳神経外科研究員
1970 年	千葉大学助教授（脳神経外科）
1975 年	筑波大学教授（脳神経外科）
1988 年	筑波大学名誉教授
1999 年	6 月 10 日 21 時 23 分筑波大学附属病院にてご逝去

お別れの言葉

能勢忠男（筑波大学脳神経外科教授）

「腰の痛みがとれたら退院して、もう1～2枚描きたい絵があるんだ」、「痛みというものは人間の思考も失わせるものなんだネ」、「痛みが少なくなつて大分楽になつたよ」、「毎日水は飲んでいるからネ」、「一寸短かすぎたかな」、こんな会話が病室でなされました。主治医共々、面会謝絶にしたい病状でしたが、「それはやめてくれ。皆と会いたいから」とおっしゃって多くの学生や面会者とお会いになっていました。私が病室に顔を出すと決まってお寝みになつておりました。そつとドア越しに室内をのぞいては帰つて来る毎日でした。全入院日数十八日間、後で主治医に伺つたところでは肝臓と肺と腰椎に病変があつた由です。享年74歳でした。

先生は昭和24年3月に千葉大医学部を卒業されました。昭和33年千葉大学医学部講師になられ、神経精神科に属されておりました。この頃に先生は脳神経外科を志しはじめたと伺っています。昭和45年千葉大学助教授になられ、後に新設された脳神経外科講座に移席されました。昭和50年4月筑波大学臨床医学系、脳神経外科の初代教授として当地に赴任されました。私が牧先生の門下生となりましたのは昭和43年4月からです。当時、千葉大神経精神科の脳神経外科グループの研究室は300番と呼ばれていましたが、これはこの研究室の電話番号ゆえでした。New York帰りのダンディな先生は一日の仕事が終える午後5時頃きまつて4～5個のグラスに氷を入れて盆にのせ、その一個だけにウイスキーを注ぎ、美味しそうに召し上がっておりました。一個のグラスにだけ酒を満たすのは飲みたい人は飲んだらという先生の思いやりが込められていた様でした。それから一旦帰宅し、夕食の後一寝入りされ、夜8時には300番に出てこられ、夜中遅くまで仕事をされるのが日課でした。我々、若い連中にとつては帰るに帰れず迷惑な習慣だと評もありました。

筑波に赴任されてからもこの日課は変わらなかつた様ですが、帰りの一一杯はなくなりました。筑波という土地柄のせいだったのでしょ。個室でしたので中の様子は知る由もあ

りませんが時には夜の町に繰り出されることもあった様です。ある時期は毎夜毎夜との噂も耳にいたしました。

研究専門領域は、神経放射線学及び小児脳神経外科学が中心でこの両学会では会長もつとめられました。筑波大学附属病院副院長、動物実験センター長として大学運営にも大いにその手腕をふるわれました。また、学生達に対しても水泳部部長、ゴルフ部長として限りない愛情を注がれました。退官後は北茨城市立病院長さらには筑波記念病院脳神経センター長として、ピンクハウスでは精神科医として老人医療に熱中されました。その合間に随筆を書かれたり、油絵描きにも集中されていた様子で、油絵では個展を何回か開かれたと聞きます。あまりにもエネルギーに駆け抜けられた人生。「一寸短かったかな」の一言の中にやり残した事柄への無念もうかがえますがどうぞゆっくりお休み下さい。

同門を代表してお別れの言葉を申し上げます。

牧 豊先生追悼文

松本雄二郎（松本眼科、1回生）

先日、昔話に花が咲き、まだまだ闊達としていて勇気づけて下さった先生が、忽然と去る訃報に接し、ただただ茫然としています。人の死がこれほど悲しく、又身近に感じたことは、今までにありません。マリンブルーの海とセルリアンブルーの夏の空がとても良く似合っていた先生、ひょっとすると、プールの水の中から顔を出し、笑顔で答えてくれる先生が、今もそこにいらっしゃるような気がしてなりません。

先生と初めてお会いしたのは確かエレクトリックの授業でした（たぶん「脳卒中」というタイトルでしたが）。その時より公私にわたり温情あふれる叱責により、生きる道を示しご指導して頂きました。授業後に学生宿舎にできた25mのプールで一緒に泳いだことが、先生と水泳部との初めての関わりだったと記憶しております。学生だった私共を相手に夜遅くまで、一期生としてどのようにするべきか、これから筑波大学はどのようにしてゆか

ねばならないのか等、お話し下さいました。そして生意気だった私共を父親のように叱って下さいました。私が大学を辞め取手の地で開業した時も、一番心配され、「人間は夢と希望を両手に抱いて生まれてきたんだよ。その夢と希望をいつまでも抱き、それに向かって頑張って歩いて行きなさい。君の勇気ある新たなる門出に乾杯」とおっしゃられました。その言葉はいつまでも私の大切な宝物です。

先生は随分長い旅をされてきました。私共の胸には先生との楽しかった思い出だけが残っております。私達は誰よりも先生を誇りに思い、その御薫陶に従い、真直ぐに正直に男気と氣力を持って大いに生きて行くことを誓います。有難うございました。ただただ有難うございましたという言葉以外にありません。安らかにお眠りください。謹んで哀悼の意を表します。先生の好きなくデイジーの白い花を、学生宿舎にあったプールに添えて…

牧 豊先生追悼文

坪井康次（筑波大学脳神経外科、1回生）

平成11年6月10日午後9時23分、あの牧豊先生が筑波大学付属病院のE-400病棟で亡くなられました。享年74歳であられました。自分こそは牧先生の愛弟子だと自負しておられる方は大勢いらっしゃる事だと思いますが、桐医会の会員の一人として僭越ながら追悼文を書かせて頂きます。

私は筑波大学に入学して間もなく医学水泳部に入部して同級生の松本雄二郎君と共に初めて牧先生にお目にかかりました。その後卒業して迷うことなく脳外科を志しましたが、正直申しまして、脳外科そのものに興味があったのか牧先生に影響されたのかどちらかと聞かれるとむしろ後者であったように思います。牧先生は皆様よくご存知のようにとてもfriendlyでopenな方でした。しかし、時にはsentimentalな少年のようで、少なくとも当時、何も知らない医学生が抱いていた大学の脳外科の教授というイメージからは遠くかけ離れていました。しかし、一度牧先生の門下生の1人となった時にまず感じたことは、先生の人間と眞実に対する鋭い勘と深い洞察力でし

た。どのような嘘や言い訳も先生には通じないと実感したこと覚えています。そして医学に関する事にかかわらず、先生にご相談申し上げると必ずはっきりとした解答をいたくだくことができました。そして、その後は何も迷うことはありませんでした。

先生は恐らくご自分の状態を全てご存知だったと思います。奇しくも牧先生が亡くなられた夜、私はE-400病棟の当直をしておりました。奥様、松崎靖先生たち主治医グループと能勢忠男先生に従って私も先生の最期に立ち合わせていただきました。先生は間違いなく最後の瞬間までそれまでと同様の威厳を保っておられました。

牧先生は数多い論文以外にも多くのエッセイ集や本を書いておられます。国際小児脳神経外科学会のアジア、オセアニアの代表Editorであられた先生はそのOfficial JournalであるChild's Nervous Systemに1997年“My memories of Japanese pediatric neurosurgery”というPerspectiveを書かれています。牧 豊先生に心から哀悼の意を表し、その最後の一節を引用させていただきます。

Today, I am deeply convinced that clinical medicine is romantic, though if you are to ask Paul Valery, he would say “No, it is poetic.” I now enjoy remembering chatting with ISPNE friends, reviewing the precious memories they have given me. I sincerely thank you, you and you for 25 years of joy.

関西風あごはずし

鍬方安行（大阪大学特殊救急部、4回生）

大阪名物の押し寿司の一種ではありません。読んで字のごとく、頸関節を脱臼させる手技で、とくに関西方面でおこなわれる方法、という意味です。牧先生の講義で、意識障害患者の気道確保法について学生をさしながら回答をもとめられた時のことです。私もさされました。ちょうどその直前に、その後入局することになる阪大の特殊救急部（救急医学教室）に見学にいき、先輩方が下頸角をひよいと押し上げていとも簡単に舌根沈下を解除さ

れるのをしばしば目撃してましたので、あごをはずすとよいと思います、と答えました。言い方が利口そうでなかったのでしょう、本質的には正しい回答なのですが、牧先生の受けが悪かった。ほっほお一つ、関西ではあごをはずすのかねえーつ、おもしろいねえーつ、とたいそいたぶりを受けました。挙げ句、その後の試験で多肢選択のなかに、気管内挿管だのエーウェイだのまともな答えと一緒に、「関西風あごははずし」の選択肢が・・。いたぶりがボディーブローです。

牧先生には、実際とてもお世話になりました。M3だかM4だか、大学に真面目にいくようになってしばらくした頃、タダ飯タダ酒に釣られて牧先生のお仕事を手伝いはじめたのがきっかけです。合間にangioや当時まだ導入してまもないCT（県南病院に県下で初めてのEMIが入って3年、とかいう時代です）の勉強をさせてもらったり、君は将来脳血管攣縮の機構を解明する必要がある、なんてことでDr.VaneやDr.MoncadaのProstaglandinsやThromboxane researchの論文、東大の浅野先生の論文などをガリ勉して牧先生の前でプレゼンする、ということを経験しながら、ここに残るんだろうなと自然に思うようになったのですが・・。ちょっとしたいきさつがあって、私は大阪大学の救急医学に入局しました。上記のやりとりは、その下準備に大阪を訪ねてまもなくの頃の出来事でした。

昭和58年、何の恩返しもできないまま大阪は中之島の大学病院へ入局し、日の明かりすら殆ど見ない研修医生活をはじめて半年ほどした頃、目と鼻の先のロイヤルホテル（当時は大阪随一）から電話がかかりました。牧先生でした。ロビーにいくと、元気か、飯を喰おう、せっかくだから上に行こう（カジュアルな店は地階にある）と、着の身着のままだからダメですよというのをぐいぐいフランス料理に連れて行かれたのでした。当然入り口でお客様・・ということになって入り口裏でお着替えです。さすが一流ホテルです。貸衣装もネクタイもサイズをそろえてちゃんと置いてありました。恥ずかしかった。さて席について、飲み物です。なにせ一流ですから、ソムリエがやってきます。いろいろ説明をきいたあと、牧先生いつもの口調で「ビールはだめなの？」ソムリエ「せっかくのご機会で

すから、是非このあたりをお試しになられてはと」牧先生「ぼくあー、ワインのことはよくわかんないや、ね、メルシャンある、メルシャン？」と爆弾発言です。ソムリエは顔色ひとつ変えず、「あいにく手前どもには品揃えがございませんので、しばらくお待ち願います」と、しばらくすると店のものを走らせて買ってこさせたメルシャンがテーブルの上に置かれました！！牧先生は「ありがと」と一言。これが大人の世界なんだ、と感じながら、なんだかよく憶えてませんが、とても美味しい食事をいただきました。美しい思い出です。

その後、私の結婚式にはわざわざ宝塚ホテルまでできていただきましたし、折にふれ大阪で筑波でお会いし、その度におごっていただきましたが、直接にも間接にも牧先生が上司であったことがなかったのがよかったです。私は最後まで一学生としておつきあい願うことができました。4年前からまた阪大に戻り、講義・ポリクリと担当しております。件のできごとを思い出しながら、気道確保のはなしになれば必ず、ほら、こうやってあごをはずすと簡単にできるやろー、舌根沈下をみたらまずこうするんやでーっと学生さんに教えております。牧先生、あごははずしは正解です。

牧爺に捧ぐ

岩本浩之（初石病院神経内科、7回生）

“脳みそをやりたくて”中枢神経系を専攻した7回生4人が、酒に飲まれつつ“BRAIN”に対する思いの丈をぶつけ合う集いを持っていた。名付けて“Young Neurologistの会”。メンバーは、鮎澤聰（脳外科）、岩本浩之（神経内科）、鯨岡裕司（脳外科）、堀孝文（精神科）、そして牧爺。実質的には、牧爺に力うむ会といつてもよかった。

グルマンのワインで始まり、頭に血が昇って「じじい、いい加減なことを言うな」などと暴言が飛び交う頃、ラ・リラのウォツカでとどめである。得意の「場の理論」で皆を煙に巻く鮎澤、取り憑かれたように戦争の危機を主張する岩本、「尊厳だの実存だのと、big

word の羅列は無意味だ！」と叫ぶ鯨岡、「俺は何でも知ってるぜ」とでも言いた気に悠揚せまらぬ堀。そんな我々をニヤリと見透かし「君達もデカルトの被害者なのね」と、牧爺が珍しく至言を吐いた。

思えば、牧爺には随分カラみカラまれた。学生食堂のコンペで馬鹿笑いしていたことをネタに、こいつ馬鹿じゃないかと思っていた、と何度も笑われた。頭部外傷の試験問題に気合いの答案を書いたら、「お前もあながち馬鹿じゃないな」とからかわれた。研修医時代の神経放射線カンファランスでは、今日こそ完璧なプレゼンテーションを、と意気込む先から、思わず質問を浴びせられ立ちすくんだ。隣のコースを泳いでいて、牧爺の足ひれが起こそす波に溺れそうになり、文句を言ったら「あっそう、悪かったね」といなされた。

旧制高等学校の優秀さを誇らしげに語る牧爺に、「その優秀な人達が、どうしてあんな愚かな戦争を起こしたんだ！」と、思い切り噛みついた。酩酊した頭には、牧爺の答えが残っていない。こころは脳に宿るか、魂は存在するか、“cogito, ergo sum”は、本当に正しいか。“Young Neurologist の会”の通奏低音は、牧爺が逝ってしまった今も響いている。

不治の病の床に牧爺を見舞った折「ここ（大学病院）を出たら、ピンクハウスで気ままにやって、最後はメディカルセンターの緩和病棟あたりでおさらばだね」とさらりと言った。憔悴した顔には、しかし微笑みがあった。やはりこいつ並のじじいではないと感服せざるを得なかった。かなうなら、緩和病棟の枕元で“Young Neurologist の会”スペシャルバージョンを開きたかった。

まだカラみ足りないぞ、牧爺！

みんな牧先生のこども。

馬場淳臣（筑波大学精神科、8回生）

牧先生は、あっという間に亡くなってしまった。イシカワくんは、亡くなる前日に牧先生が「ボクもう死んじゃったよ」と会いに来たって云うし、堀先生は遠くカナダで、たくさん買い込んで出さずじまいになってしまったカードを目の前に置いて、呆然としている

のだろう。イワクマは苦労人だけあって電話の向こうで何かをぐっと呑み込んでた。

日曜日のお弔いは、さながら学年お構いなしの同窓会だった。ようようと声をかけて、しゅんとしほむことの繰り返し。何も云わなくてさびしいねえと目が語る。牧先生は死なないことになっていたんじゃなかった？って。

ヤマモっちゃんは、イタリア人の用心棒みたいに髪を伸ばしていたけれど、それは牧先生に髪が長い方がかっこいいといわれたからだって云ってた。シバタは泣いてんだか怒ってんだか、よく分からない顔で突っ立ってた。ゆうちゃんは、牧先生のリクエストで買ってきていたポルトガル土産の帽子のやり場に困ってた（だいたいポルトガルの帽子ってなに？ どういう意味？）。おミズはこここんところずっと元気がない。ユカコさんは自宅に帰ってから電話してくれた。お別れの会をしようよって。前みたいにもう一度牧先生を囲んでって。

もう一度牧先生を囲んで。

こんな簡単なことがもう二度とできなくなってしまったなんて、信じられる？ Ad-Lib で、ラ・リラで、プールサイドで、アトリエで、（もう一度 Ad-Lib で）、あんなに何度も何度も、牧先生を囲んでいたのに。牧先生を囲んで、ぼくらはどれだけ時間を過ごしたろう。

牧先生は、稚氣を愛しておられた。正確に言えば稚氣の中に潜む恐れ知らずの志の高さを愛しておられた。だから、どんな突拍子のないことを云っても「やってみたら」と笑っておられた（「世界はあなた達のものだよ」とも！）。分かった風な、賢しら顔の話には、あとで「つまないよね」と。先生ご自身が、「志」の力で、現実という地面から、ほんの少しだけ浮き上がっておられた。だからみんなに軽やかに見えたり、だからみんなにみんなが憧れていたんだろう。

お医者さまでございます。博士です。論文書いてます。人の親です。偉そうな顔で説教を垂れることもあります。でも、みんなもともとは、何のことはない、牧先生のこども。だからみんな戸惑っている。居心地のいい浜辺から泳ぎはじめて、ずっと泳いでいて、振り返れば見ててくれる人がいて、ちょっと生

意気でも、ちょっとぐれてても、安心して沖に向かっていられたのだけれど、突然その人がいなくなってしまって、座る主のいないデッキチアがぼつんと浜辺にあるだけ。ああ、お酒が切れたので取りにでもいらっしゃったのだねって、こんなことよくあることだからねってふと思ってしまったけれど、今度はそうじゃありませんでした。

牧先生は空と海の間のどこかにお帰りになってしまいました。

牧先生の思い出

柴田智行、（筑波メディカルセンター病院
脳神経外科、8回生）

私が学生時代の頃の牧先生というとアドリブのカウンターに座っていた姿を思い出します。バブ・アドリブは平砂学生宿舎のそばにあった居酒屋で、主に学生相手の店であり、医学生が多く集まっていました。先生はときどき店に現れてはその当時学生だった私たちの相手をして下さいました。未熟者の私たちの不満を聴き、議論をし、また他愛のない話をして夜は更けていきました。人生の大先輩であり、教授という要職にありながら、私たち学生と話すときは対等の立場で話して下さいました。多くの人が先生との会話を楽しんでいました。学生が夜中電話で呼ばれてアドリブに駆けつける光景も見られました。本当に私たち学生のよき理解者でした。

この頃のご縁もあり大学卒業後は脳外科に入局させていただきました。先生はまもなく御退官になり、しばらくご一緒する機会がありませんでしたが、レジデントを終わる頃になり、筑波記念病院で再び先生とご一緒することができました。毎朝8時からのレントゲンミーティングにはいつも時間に正確にいらっしゃいました。長いと1時間近くなる事もありましたが、先生は立ちどうしで指導してくださいました。必要があれば皮膚ペンでシャーカステンに図を書いて説明して下さいました。画像診断ばかりに気をとられ患者さんの職業や既往歴をとっていないと”興味ないのね”とおしゃかりを受けました。典型的な脳血管障害の症例で診断は決まっているとばかり

りにプレゼンテーションすると、こういう事も考えられると違った面からの見方を教えていただきました。珍しい症例があれば発表を勧めて下さったり、こんな事を調べたらと臨床研究のヒントをいただきました。また臨床家でも好きな分野で specialist になりなさいと教わりました。いくら優れた generalist になつても”ああ、generalist のAさん”とはいわれない。秀でたものがあれば”X分野のAさん”と覚えてもらえると。

仕事の面だけでなく、例えば認定医試験に合格したときなど先生から飲みに誘って下さり、そのお心遣いを大変うれしく思いました。飲みに行けば、お店から、”あいつを呼べ”と電話したりするのはアドリブの頃の先生と同じでした。

昨年記念病院より転勤となりその後あまりお会いする機会がなく、今年の4月にあった集まりでお会いしたのが最後となってしまいました。学生の頃よりお世話になってきましたが、ご恩返しできないうちに、大変つらいお別れとなってしまいました。先生に教えられたことを忘れず心に刻んでいたいとおもいます。

牧先生 ほんとうにありがとうございました。合掌。

牧先生ありがとうございます。我々もがんばります。

浅野 道子（医学研究科、11回生）、
曾根 博仁（臨床医学系内科、11回生）

牧先生は、25年前の創立当初から御定年まで、本学医学水泳部の顧問として尽力なさり、私達水泳部員に多大な影響を与えてくださいました。現在私達一同は、牧先生を突然失って、まだ茫然としている状態です。

牧先生を思って脳裏にまず浮かぶのは、教壇に立たれたお姿（私共は、かろうじて牧先生の名講義をいくつか拝聴できた最後の幸運な世代に属しますが）よりむしろ、海水パンツに青水泳帽をかぶったお腹の丸い、小麦色に日焼けしたお姿です。そのお顔は、病院や教室での医師としてのきびしいお顔ではなく、無邪気なやさしい笑みをたたえて私達を見守っています。

夏の試合シーズン終了後には、部員一同で南島にダイビングリゾートツアーに行くのがならわしです。牧先生が始めて、この学生貧乏ツアーワーに一緒に行きたいと希望された時には、最初誰もが、教授がいらっしゃると気を遣って大変だなと思いました。しかし実際心配は全く無用で、孫のような現役部員らにすっと自然に溶け込み、フィンとマスクをつけた牧先生は、スノーケリングで海底遊泳を堪能されていました。めずらしい魚をみつけたり、きれいな貝を拾ったり、先生の旺盛な好奇心は、医学の分野にとどまらず發揮されました。一日の終わりは、きまって海に沈む太陽を眺めに出ていかれ、先生の感受性は若者以上に高いと感じました。牧先生が、南島での時何を思っていらっしゃったのかは、先生の著書『アルバトロスの旅』で少しだけ知ることができます。

御定年後からは、著作活動に加えて油彩を始められました。芸術専攻の水泳部員を師として、独創的な作品を次々に精力的に描かれ、個展を開かれました。おもに大きな作品は、真っ青な南の海に水着の若者がたたずむ、まさにみんなでいたダイビングツアーの光景でした。ごく最近では、インターネットを始めないとおっしゃられ、詳しい現役部員に頼んでコンピューターを選びにいかれたばかりでした。私共は、先生の常に前向きでエネルギーッシュな姿勢に舌を巻くばかりでした。

今回の突然の入院中も先生はベットの上で、「もう一度海が見たい」「秋の個展のため、今描いている絵を書き上げたい」といつもの前向きな姿勢を崩しませんでした。なによりも心をうたれたのは、先生は御自分で不治の病に侵されていることを御存じで、かつ厳しい体調にもかかわらず、最後まで、私達には愚痴ひとつおっしゃることなかったことです。それどころか、御自分の教え子たちがどうがんばっているか、人の心配ばかりされていました。入院当日、先生に呼ばれて、病室におじやましたときにも、「君たちの経験をどんどん若い人たちに話して、彼らをどんどん stimulate してあげてください」と力強くおっしゃっておられました。

牧先生のお別れ会当日、水泳部のみんなで集まりました。その短かった御闘病の終わり頃に「私がもしも、の時には、みんなで集ま

って思い出でも語り合う「明るい」飲み会を開いてくれよ」とおっしゃられたからです。そのとおりに開かれた集まりには、多くの若い人たちが各地から駆けつけました。いつまでも失われない青年のような好奇心とみずみずしい感性、勉強も遊びも一生懸命の絶妙なバランス感覚、年齢や地位にとらわれることなく学生でもレジデントでも一人前の人物として、あたかも友人のように扱ってくれて、勉強の仕方から人生観まで真正面から親身になって相談にのっていただいたことなどなど、20歳近く離れた同窓が、牧先生との楽しかった思い出を熱く語り合い、さまざまなエピソードとともに泣いたり笑ったりしているのをみて、牧先生がいかに私共の精神的支柱であったかを改めて痛感しました。

泳ぎと海と酒、そして若人を愛した先生の深く広い人間性と魅力については、みなさんも御存じのとおりで、このような短文にはとても書き尽くせません。残された私共ができるることは、牧先生が私共に注いでくださった情熱・私共に託した夢・将来への希望に思いをいたし、悲しみを乗り越えて、牧先生がいつもそうであられたように前向きに頑張つていきことだと思います

牧先生のこと

菅ヶ谷純一（河北総合病院内科、19回生）

「ハァイ、牧です。」そんな電話がいつかまたかかるくるような気がします。本当に牧先生はお亡くなりになったのでしょうか。

牧先生との最初の出会いは大学1年生の医学水泳部の飲み会の席でした。私は酔って立ち上がり、牧先生の前で踊り、上半身裸になってしまいました。私は牧先生を見つけて挨拶をしました。この出会いは牧先生にとってかなり衝撃的だったらしく、その後何回も先生とお話をすることになりましたが、先生は何度もこの時のことを思い出して話されていました。私は次の医学水泳部の飲み会で友人の佐々木を先生に紹介しました。彼は絵画愛好会にも所属しており、牧先生はこの出会いを介して油彩を始められました。このことを、後の手紙で先生はこのように書かれています。

「菅を介して佐々木を知り、彼を介して油彩を覚え、油彩を介して自己表現の楽しさを、70歳過ぎて知ったのです。」

先生と佐々木と私とでよく会食を開きました。学生とは生意気なもので、誘いの電話はいつも先生からでした。生活のこと、医学のこと、水泳部のこと、旅行のこと、恋愛について、性について、生命について、将来について、いろいろな話をしました。多くの情報が入ってくる学生時代でしたが、先生のお話は、生きる指標となったような気がします。牧先生だったらどのようにお考えになるのだろうか。迷ったときにはいつもそんな思いがどこかにありました。

牧先生は夏になると医学水泳部の数名と、モルジブなどの南の島へ旅行に出かけていました。私はオーケストラの予定などと重なって、とうとう牧先生と島へ行くことはできませんでした。非常に残念に思います。「この夏がもう最後だと思う。」私が5、6年生の時は、先生はいつもこう言っておられました。

運転手になって、先生の実家に行ったことがあります。先生の母上はまだご健在で、一人で生活なさっていました。「母さん僕ねえ、こんど音楽療法っていうのを始めてみようと思うんだけどどうかな。」「あら、いいわね。ユウちゃんがやりたいのならいいじゃないの。」こんな会話の中に時代が逆戻りしたような、母と子の姿がありました。先生がいつになっても新しいものに挑戦しようとするその力の陰には、このお母上の存在があるのだと思いました。帰りがけに館山の民宿に泊まり、海水浴を楽しみました。先生は沖まで何回も泳ぎ、楽しんでおられました。私はそのパワーに驚きました。

先生は油彩を始められ、アトリエまでお造りになりました。その名も「牧診療所」。奥様には内緒であったとのことです。次々と作品が完成していきました。医学水泳部に所属していた芸術専門学群の猪口を師として、積極的に創作活動に励んでおられました。多くの学生を捕まえ、モデルにして、幻想的な絵を描いて、個展まで開いておられました。1999年5月2日～8日の個展の案内には「12月にまたつくばでやりますが…」とありました。

私が大学6年生のとき、受験勉強に疲れたためか、いろいろ考えた時期がありました。

その一つに「人は何のために生きるのか。」というものがあり、その疑問を牧先生に手紙で質問したことがありました。それに対して牧先生はこうお便りして下さいました。「『人は何のために生きるのか？』その問は、百人には百の意見があることを尋ねているような問です。僕の考えは『私は私が生きている喜びを素直に感じ、自分らしく単純に表現したい。それ以上の価値も何もない。10年もすれば僕が存在したことなどは誰も知らないと思うし、そんなことには関係なく、僕は人を愛し、感謝して生きている。』だけと。」私はこの言葉に感銘を覚えました。しかしだ一つだけ産生できない部分があります。10年、いや20年過ぎたとしても、先生の存在は私の心の中に深く焼き付いていると思います。

「牧先生、ありがとうございました。」6月6日夜、白衣で忍び込んだ私が最後に先生に申し上げた言葉です。牧先生、本当にありがとうございました。

今ごろ、天国で個展の準備をしておられるのでしょうか。

「ハワイ、牧です。」そんな電話がいつかまたかかるてくるような気がします。



編集後記

今回、同窓生で脳神経外科に進まれた方々のご寄稿により、故 牧 豊先生の追悼文集が会報の臨時増刊号として発行の運びとなりました。あまりに急なことで準備期間がほとんどなかったのですが、7回生の谷中清之先生を中心に手際よく原稿を集めてご投稿下さいました。事務局としても、一刻も早く同窓生の皆様にお届けした方がよいと考え、オフセット印刷ではありますが、第45号と一緒に手元に届けさせて頂きました。

去る5月15日に第19回桐医会総会シンポジウム「医療の標準化」が医学専門学群棟4階大会議室で開催されました。牧先生は聴衆として参加され、貴重な考え方を私たちに紹介して下さいました。これにつきましては、次号でご紹介する予定です。先生の心の琴線に触れるお言葉を聞くことが出来なくなってしまい残念でなりません。私たち卒業生に注いで下さった深い愛情に感謝し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。(あ)

桐医会会報 第46号(臨時増刊)
発 行 日 1999年7月
発 行 者 山口高史 編集 桐医会
〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学医学専門学群内
印刷・製本 株式会社 イセブ